

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年 (百十六)

第五章…二つのこよみ(西暦とヒジュラ暦) (二)

百十六 西暦に侵食されるヒジュラ暦(二―四)



日本でもかつては月の満ち欠けによる太陰暦が使われていたが(旧暦)、季節のずれを調整するために閏月(うるうづき)が設けられていた。しかしヒジュラ暦ではそのような操作は行われなかったため毎年季節が少しずつずれていくことになる。その結果断食月として知られるヒジュラ暦第九番目のラマダーン、或いはヒジュラ暦最後の十二番目の月の恒例のマツカ大巡礼(ハッジ)が真夏になることもあれば真冬になることもある。ヒジュラ暦では三十数年単位で季節が巡ることになる。西暦六百二十二年がヒジュラ元年であったが、今年(二千二十四年)四月にヒジュラ暦は千四百四十六年を迎える。西暦六百二十二年から二千二十四年までは千四百二年間であるが、ヒジュラ暦では千四百四十六年間であり暦の上では四十四年も先に進んでいることになる。

イスラーム諸国と昔の日本が同じ太陰暦を使用しながら日本では閏月を設けて季節のずれを調整したのに対してヒジュラ暦では今も調整されない理由を考えると興味深い。そもそも毎日の月の満ち欠けを暦のベースにすることは、太陽が一年をかけて高低を繰り返し、日の出と日没がほんの少しずつ早くなったり遅くなったりする現象に比べて目に見えてわかりやすい。そしてもう一つイスラーム発祥の中東には月と太陽に対する特有の感覚の違いが

あることが指摘できよう。日本のような温帯性気候の国では太陽は恵みであると考えられる。しかし灼熱の乾燥した砂漠が多い中東では太陽は時に死を意味する。それに対して穏やかな月夜は憩いの時である。アラブの人々は太陽よりも月を愛する。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: Arehakazuyal@gmail.com